

カーポ
ニユートル

石連がビジョン

石油業界も50年までに



杉森会長

石油連盟の杉森務会長（ENEOSホールディングス会長）は19日に定例会見を行い、足元の需要動向や原油価格の展望について語った。原油価格（ドバイ）の展望につ

いては「当面は60ドル台で推移するだろう」との予想を示した。また、2050年の社会全体のカーボンニュートラルに貢献する「石油業界のカーボンニュートラルに向けたビジョン」を発表した。ドバイ原油は直近1カ月で、一時60ドル後半まで上昇した。その要因を「3月の石油輸出国機構（OPEC）と非加盟の

主要産油国からなる『OPECプラス』の協調減産緩和が大幅だったことやサウジの自主減産継続」「中東の地政学的リスクの再認識」などと分析した。また、コロナ禍で落ち込んだジェット燃料需要に関しては「現状が急回復することはない」と述べた。

今回公表された長期ビジョンは、政府のカーボンニュートラル目標などを受けて、19年5月の「石油産業の長期低炭素ビジョン」を見直したもの。ビジョンでは、業界の事業活動にともなう二酸化炭素（CO₂）排出を、50年までに実質ゼロとする目標を示した。また、合成燃料を始めとするカーボンリサイクル関連技術の開発により、社会全体のカーボンニュートラル

にも貢献していく構えだ。今回の予想では、50年時点でも一定程度の石油製品（燃料・化学原料）の利用は残るとした。



原油、強気相場に陰り 一時60ドル割れ、ドル高や欧州コロナ拡大重荷

原油相場の強気ムードが後退した。欧州の新型コロナウイルス感染再拡大で需要回復の遅れが意識され、ニューヨーク先物は18日に一時1バレル60ドルを割り込んだ。米長期金利が急伸し、ドルが主要通貨に対して上昇したこともドル建ての原油価格を圧迫した。協調減産で相場を下支えしてきた主要産油国の対応に注目が集まる。

WTI（ウエスト・テキサス・インターメディアート）先物（期近）は18日まで5営業日連続で下落し、同日の終値は60ドルと前日比4.6ドル（7.1%）急落した。一時は58.2ドルと、約1カ月ぶりの安値まで売り込まれた。

欧州で新型コロナの変異株の感染拡大が続き、燃料需要が再び停滞するとの見方が市場心理を冷やした。フランス政府は18日、パリなどで少なくとも4週間の外出制限を始めると発表。英国ではアストラゼネカ製のワクチン供給が減るとも伝わり、経済正常化の遅れが懸念されている。

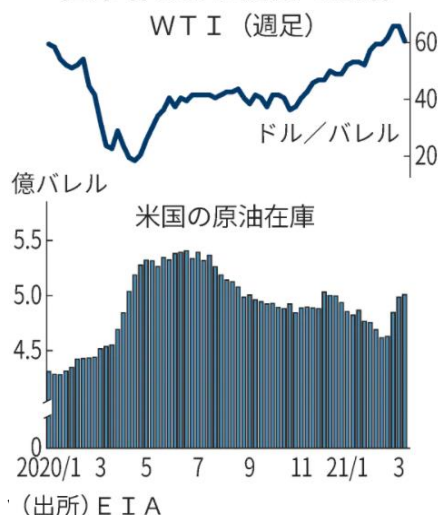
さらに米国ではインフレ懸念を背景に長期金利が一時1.75%と1年2カ月ぶりの水準まで上昇。日米金利差の拡大を手がかりとした円売り・ドル買いが優勢となり、ドル建てで取引される原油の割高感が意識された。米国株式とともにリスク資産とされる原油の売り圧力が強まった。

昨年秋以降、原油価格は需要回復を織り込む形で急ピッチで上昇した。特に最大消費国の米国では巨額の追加経済対策が成立し、景気回復期待が先行。米商品先物取引委員会（CFTC）によると、大口投機筋のWTIの買越残高は9日時点で約8カ月ぶりの高水準に積み上がった。過熱警戒感も強まっており「買い持ちしていた投機筋が弱材料をみて一気に利益確定の売りに動いた」（エレメンツキャピタルの林田貴士氏）。

米エネルギー情報局（EIA）が17日発表した週間石油統計によると、原油在庫（戦略備蓄除く）は約5億80万バレル。前週より約240万バレル増え、3カ月ぶりの高水準となった。2月の寒波の影響で製油所の稼働が伸び悩んだため。年明けから8割を超えていた稼働率は足元で76.1%と1カ月前より7ポイント低下した。

今後の焦点は主要産油国の対応だ。石油輸出国機構（OPEC）は11日に公表した月報で、21年前半の世界の石油需要見通しを前月から引き下げた。需要回復に対して慎重な姿勢を崩していない。ニッセイ基礎研究所の上野剛志氏は「特定の国の微調整はあるかもしれないが、今回の急落で現行の減産はほぼ維持される可能性が強まった」とみる。いったん相場は60ドル近辺で下げ止まった。しかし、早期の需要回復の期待はしぼんでおり、産油国が次の一手に動くまでは足踏み状態が続きそうだ。市場関係者の間には「上値のめどは60ドル台前半」との声が増えている。

在庫増もあり足元で急落





配合飼料が最高値 穀物高・円安響く JA全農、4～6月期大幅上げ 畜産農家の負担増

家畜のエサとなる配合飼料の価格が上昇している。全国農業協同組合連合会（JA全農）は19日、4～6月期の農家向け出荷価格を1～3月期に比べ全畜種平均で1トン5500円（8%）引き上げると発表した。新価格は平均で1トン7万2300円前後となる計算で、過去最高値となる。最近の原料価格の急上昇を転嫁する。畜産農家のコストは増す。

値上げは3四半期連続で、米国の干ばつを背景に同じく5500円値上げした2007年1～3月期以来の大幅な引き上げとなった。

JA全農は国内シェアの約3割を占める飼料最大手。日本の配合飼料の年間使用量は約2400万トンで、原料の5割をトウモロコシ、1割を大豆ミールが占める。今回の引き上げは1～3月の原料相場や海上運賃、為替相場を基準にして決めた。

トウモロコシは、中国による米国産の大量買い付けや米国の生産減に伴う期末在庫率の低下、南米産地の収穫の遅れなどによる需給の引き締まりを背景に国際価格が上昇した。指標となるシカゴ市場の先物価格は現在1ブッシェル5.4ドル前後。ここ3カ月で1割強上昇し、3月上旬には7年8カ月ぶりの高値をつけた。

大豆ミールは、米農務省の1月発表の需給見通しで大豆の輸出需要が上方修正されて期末在庫率が歴史的な低水準となったことや、南米産地の乾燥天候による作柄悪化観測を受け、1月中旬には6年7カ月ぶりの高値をつけた。足元の価格はやや軟化しているものの、依然高値で推移している。

原油高で輸送コストも増えた。中国向けを中心に穀物輸送が堅調だったほか、世界的な寒波による石炭輸送需要の急増もあって海上運賃を押し上げた。為替は新型コロナワクチン普及などによる経済活動回復への期待感や米国の追加経済対策などから円安が進み、調達コストを押し上げた。

飼料費が畜産農家の経営コストに占める割合は4～6割程度だ。青森県のある鶏卵生産者は「値上がりが続ぎ、高止まりすればいよいよ経営が厳しい。外的要因で上げているため養鶏事業者にはできることは少ない」と話す。

鳥インフルエンザ感染の拡大による需給の逼迫から、鶏卵の卸値は前年同期比1割強高い。足元では卸値の上昇が配合飼料価格の高騰をある程度吸収しているものの、鶏卵の生産が持ち直し、卸値の水準が下がった際には、農家の経営環境は厳しさを増しそうだ。

食肉加工メーカーの担当者は「飼料高で鶏肉の調達価格が上がれば、加工メーカーなどは受け入れざるをえない」と明かす。

穀物相場は今後も高値で推移するとの見方が出ている。資源・食糧問題研究所の柴田明夫代表は「中国の飼料需要は底堅く推移しそうだ。南米の天候不順もあって、大きな値下がりは見込みづらい」と指摘している。





サウジ石油施設への攻撃で火災、フーシ派か

[ドバイ 19日 ロイター] - サウジアラビアのエネルギー省は19日、首都リヤドにある石油精製施設が無人機によって攻撃を受けて火災が発生し、その後鎮火したと述べた。イエメンの親イラン武装組織フーシ派は、リヤドにある施設を無人機6機で攻撃したと声明を出した。

サウジの国営石油会社サウジアラムコが運営する施設がサウジ時間の午前6時5分（日本時間午後12時5分）に攻撃された。エネルギー省は人的被害や石油供給への影響はなかったと述べた。

武装組織フーシ派はエネルギー省の発表前に、リヤドにあるアラムコの施設を攻撃したと表明した。攻撃した施設は特定しなかった。

サウジのエネルギー省は無人機を誰が、どこから発射したかには触れなかった。

フーシ派はここ数週間、サウジへの攻撃を強めている。フーシ派の報道官は、サウジのイエメンへの「侵略」が続く限り、サウジへの攻撃を続け、さらに強めると話した。

サウジのエネルギー省は今回の攻撃やその他の攻撃により、サウジにとどまらず世界全体のエネルギー供給の安定が脅かされたと主張した。

サウジ主導の連合軍は2015年3月、フーシ派が14年終盤にイエメンの首都サヌアを掌握したことを受け、同国に介入した。

フーシ派は、イエメン政権の支配下にあるマーリブも侵攻している。紛争終結に向けて国際連合と米国はフーシ派に対し、軍事攻撃を激化させるのではなく協議に応じるように促している。



原油先物6日続落、欧州再ロックダウンで需要回復期待が後退

[東京 19日 ロイター] - アジア時間の原油先物価格は6営業日続落。欧州で新型コロナウイルス対策のロックダウン（都市封鎖）が再び導入されたことを受け、燃料需要の回復期待は薄れており、週間では9%近い大幅な下げとなっている。

前日は昨年夏以降で最大の下落となった。

0552 GMT（日本時間午前2時52分）時点で、米WTI先物は0.40ドル（0.07%）安の1バレル＝59.96ドル。北海ブレント先物も0.10ドル（0.16%）安の63.18ドル。

前日は7%急落。その後、アジア時間の午前中の取引では小反発していた。OANDAのシニア・マーケット・アナリスト、ジェフリー・ハレー氏によると、現物のバイヤーが安値で買いを入れた。

豪コモンウェルス銀行の鉱山・エネルギー商品調査部ディレクター、ビベック・ダール氏は、欧州やその他地域でのワクチン接種が進まないことに関連する需要懸念が価格に影響を与えていると指摘。

ブラジルなどの感染増加やドル高も市場の重しになっている。

潤沢な原油供給もマイナス材料。共同石油統計イニシアチブ（JODI）が18日公表した統計によると、1月のサウジアラビアの原油輸出量は7カ月連続で増加し、2020年4月以来の高水準に達した。



ゴールドマン、ブレント原油先物は今夏に80ドルまで上昇と予想

[19日 ロイター] - ゴールドマン・サックスは、原油価格の軟化は買いの好機と指摘した上で、北海ブレント先物について、最近の急上昇は一服しているが、今年夏には1バレル=80ドルに値上がりするとの見方を示した。

ブレント先物は今月8日、新型コロナウイルスのパンデミック（世界的大流行）が始まってから初めて、1バレル=70ドルを上回った。欧州の需要減退やドル高への警戒感を背景に今週は下落しており、19日は1バレル=63.47ドルで推移している。

ゴールドマンは18日付のリサーチノートで「イランの輸出は年初から日量70万バレル増加したとみられるが、原油市場は2月以降、日量250万バレルという大幅な供給不足になっていると推定される」と分析。

さらに、新型コロナワクチンの接種が進んだ地域で需要が改善することにより、世界の原油需要は今後数カ月で大幅に拡大するとし、ブレントは3月の65ドルから今年夏には80ドルに上昇すると予想した。

ゴールドマンは、米国でのワクチン接種加速と財政支出拡大が、需要見通しの上振れリスクだとした。